

三十三回忌記念出版

正信偈講義

全4卷

法藏館

安田理深著

中 売 販 価 特

刊行の辞

親鸞仏教センター所長 本多弘之

安田理深先生の講義録は、『安田理深選集』（文栄堂書店）以前には、小冊子のようなものしか入手できなかった。当時は聞法の会座に立ち会った者の忘備録として、個人出版に類するような形で出されていた。先生自身は、講義録に手を加えるということをされなかったのである。

先生が聞法の上位に置かれたのは、求道心の涵養には、人と人が出会う場こそ大切であるとお感じになっておられたからではなかったろうか。それだけに、人数に関わらず、聞法意欲のある会座であるなら、遠近を問わず身を運ばれ、こんこんと仏法の極意を解き明かされたのであったが、ご自分の講義が文字になるについては、ほとんど許可をされなかった。

選集を編集するに当たり、先生に許可をお願いに行った時のこと、「そんなことは、自分は関知しない。聞いた者が残したいのなら、それは聞いた者がすればよい」と、にべもないお返事であった。なるほど「如是我聞」とはこのことかと、思い当たったことであった。

選集の編纂にあたって、内容に組み込むべきものは多々あったのであるが、分量の過多を避けたために、取り上げられない講義録も多かった。『撰大乘論』や『解深密経』、『教行信証』の「行巻」「証巻」「真仏土巻」「化身土巻」等の、未公刊の膨大な講義録が存在していたのである（後に「証巻」「真仏土巻」の講義録は、選集の別冊として出版された）。

その一つである「正信偈講義録」が、このたび安田理深先生の三十三回忌を機縁として、是非とも出版しようという願いが相応学舎につどう若い方々に受けとめられて、仲野良俊氏の講義ノートをもとに原稿化・整文・校正等がなされ、法藏館から世に出ることになった。この講義は、安田理深先生の還暦前後の、思索力も表現力もほぼ完成し充実した内容になっている。これを読むと、安田理深先生の菩提心が親鸞聖人の信念に肉薄する現場に立ち会うような臨場感を覚えるのである。固い岩と岩がぶつかって火花を散らす現場である。これを見るにつけても、聞法ということの一大事を知らされるのである。

本書は、現代日本の混沌とした思想状況や不安感いや増す社会体制の中に、大悲による確固として揺らぐことのない信念を求める求道の志にとって、必ずや大きな指針を得られる書であると信じ、ここに推薦させていただくことである。

推薦のことば

「正信偈」に正しく 問いかけのできる人

大谷大学元学長 訓覇暉雄

昔ロサンゼルス市の別院を訪ねた折、参拝者の椅子席のそれぞれに、勤行本としてローマ字の「正信偈」が下げられていて、ナルホドと大いになぞく

来……」と口にしていました。身に付いた言葉だからこそ、人生の大事な時に、ふと、想い起こされてくるのです。しかし、そのままでは、民俗宗教の中に取こまれてしまう危険性があります。安田先生の講義によって、その意味が解明される時、**「十方衆生」と呼びかける本来の普遍宗教としての「正信偈」のすがた**があらためて開示されるのです。

今般、仲野良俊師のノートによって、安田先生の「正信偈講義」が刊行されるという。この講義は、ちょうど私が北米開教に携わっていた十年の間に行われたもので、私の相応学舎歴で言えば、空白の時代に当たる。

安田先生は、「坊主根性は、人に教えたがる。それを学生に戻す。学の座に立たしめる。それが相応学舎だ」と言っておられたという。

するにあたり、『正信偈講義』全四巻が出版されることとなった。

先生のご講義は前に挙げた心靈の貧しさとその悲嘆、つまり何ものも充たすことのできない内生活の空虚さを充たす道としての「正信念仏偈」に直面された記録であると言えよう。親鸞聖人の「正信偈」制作は仏法の事業であった、研究発表でも詩人の仕事でもない。つまり私的動機からではない。したがって安田先生のご講義の動機もまた、

は、真宗門徒のすべてにとつて、口に馴れ耳に親しいものではあるが、しかしそれにふさわしく内容理解がともなってきたわけではない。經典内容のほかに、異なった時と異なった処を生きた七人の人々も登場するのであるから、「正信偈」が、あらゆる問いに打てば響くように答えてくれる聖典になつてくれれば、それは真宗門徒にとつてこの上ない幸いである。

しかし、答えはもともと正しい問いかけを俟って初めて与えられるものである。今日の混沌とした世界状況を踏まえて、「正信偈」に正しく問いかけのできる人は、安田理深先生において他にあるまい。講義がなされた時から半世紀が流れ、時代の終末論的色彩がいよいよ濃くなつてきているが、それだけに一層、しっかりと末法史観にたつた先生の「正信偈」解説に期待すること大である。

普遍宗教への道

真宗大谷派教学研究所元所長

児玉暁洋

民俗宗教と普遍宗教ということがあります。安田理深先生の「正信偈」の講義は、我われを普遍宗教という広い世界に解放してくださるに違いありません。

「正信偈」は、おそらく、蓮如上人以来、真宗門徒の勤行として用いらられ、広く民衆の間に浸透していきました。それは、門徒にとつては、朝夕のお勤めとして、言わば、生活習慣として、身についた言葉となつていました。私もまた、子どもの時から、その意味がわからないままに、「帰命無量寿如

イニシテ、去リニシテ、ノ

大谷専修学院院长

狐野秀存

「二人して行くなら二人とおもえ、その一人は親鸞であると。二人して行くなら三人とおもえと、その一人は親鸞であると。これは「御臨末の御書」でしょう。私は信國さんとはですね、そういう関係です。(略)だから、信國さんが死んだらね、半分からだが無くなつたんです。だんだん日がたつと同時にですね、自分の体が半分欠けたような感じでおります」(「祖聖に續かん」大谷専修学院)

信國淳先生の学院葬において語つてくださった安田理深先生の言葉である。相応学舎はひと時、京都市下京区高倉の信國先生の大谷専修学院長役宅で開かれていた。高倉の役宅へうかがうと、床の間の横に「相応学舎」の表札が立てかけてあつた。

親鸞聖人の教えの特色は、果上の弥陀の摂化の具体性を因位の法蔵菩薩の願心として明らかにしたことにあると言えよう。安田先生と信國先生は曾我量深先生にしたがつて、信心からはじまる仏道を歩まれた、たぐい稀な人たちであると思う。

学生に戻す

真宗大谷派元宗務総長

木越 樹

曾我量深師一門に三人の学友がおられた。訓覇信雄、松原祐善、安田理深の三人である。訓覇師は教団を背負い、松原師は大谷大学を背負い、そして安田師は、曾我量深先生の学的精神を継承して、生涯を学び尽くされた。上戸一形と言うのであろう。

本願以外に十方衆生はない

真宗大谷派元宗務総長

熊谷宗恵

「十方衆生があつて本願があるので、本願以外に十方衆生はない。本願以外に十方衆生があるというようなことは妄想である……」(「自己に背くもの」文明堂)

これは、私が安田理深先生を思い出す時にいつも付いてくる言葉です。世間的価値観、常識的仏教理解とはまったく違った方向から語りかけてくる先生の言葉には、正直なところ、はじめは違和感さえ覚えました。

しかし、教学研究所に勤務していたころの先輩や、地方での相応学舎で机を並べた法友たちのおかげで、いつしか『安田理深選集』を座右に置く身となりました。

それと合わせて思い出すことは、いつも先頭に立つて聞法しておられた仲野良俊先生です。先生のうしろ姿には聞くことの尊さを教えられました。「正信偈」の講義録が出版されることに、心より賛意を表します。

教行信証論としての正信偈講義

真宗大谷派蓮念寺住職

王来王家真也

「心霊の貧しさ——それは吾等の限りなき悲嘆である。吾等はひたすら内なる霊の充たされんことを願ふ」

安田理深先生二十六歳、自筆論文「自証の論理」冠頭の文である。

このたび先生の三十三回忌をお迎え

さることながら、「教行信証」全体にその内容は及んでおり、どの頁を拝読しても「教行信証」全体に通底している。したがって今回の「正信偈講義」全四巻は、「教行信証」論という獨創性を持つものであると思う。

菩薩道の実践は往生道

洛南高等学校宗教科元講師

虎頭祐正

かつて、如実知自心と如自当知との対話があつたと聞く。敗戦後の混沌の中で真人社から同朋会運動に至る熱気が、宗派を超えて深く東寺の一人に響いた。それが、奇跡と言われた洛南高等学校の再生を担われた三浦俊良校長の誕生に繋がる。その秘密の鍵は何であつたか。彼も我も初祖は竜猛(龍樹)である。何が仏教の歴史を形成したか。

安田理深先生は言われる、「道というものは宗派の独占物じゃない。道を離れたら人類はないんだ」と。それを受けて晩年の三浦先生は「人生の師が説かれた大道です。私は今もほそぼそと歩いています」と述懐された。身は東寺、心は洛南に在って菩薩の学としての『十地経論』に照し、時には余尊の法を借りて、「正信偈」を内心に聴聞され、南無大師遍照金剛と南無阿彌陀仏の呼応を念じて学校教育に献身された。聞法なくして学校も国の成長もない。「凡夫往生ということは、凡夫をして菩薩たらしめる」「仏本願の道というものが、自分の歴史であつた」などの金言を編まれた待望の『正信偈講義』の公刊を喜びたい。

安田理深『正信偈講義』全4巻

特価販売中

(2013年12月～2014年8月)

□ 価格(※分売不可)

特別割引セット価格 一九、〇〇〇円

※書籍代振込手数料・荷送料はサービス。

※特価は、専用注文書でのお申込みとなります。下記までお問い合わせください。

定価(セット価格) 二二、〇五〇円

※8%税の時、二二、六八〇円(税込)。10%税の時、二二、一〇〇円(税込)。

□ 体裁

A5判・上製カバー装・平均三〇〇頁

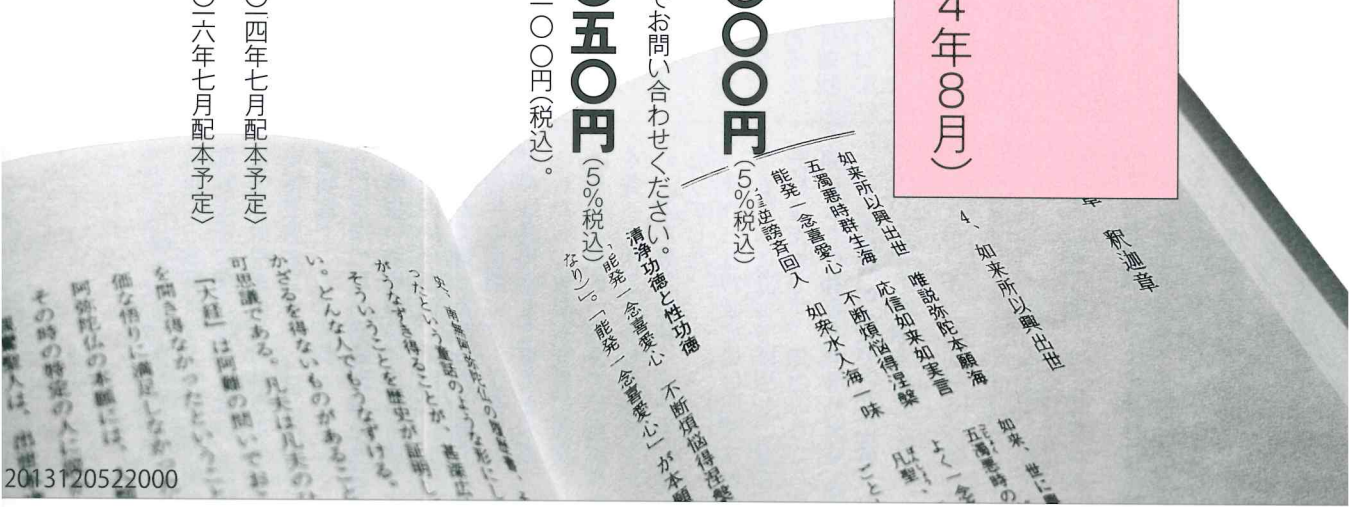
□ 配本

第一巻 (二〇一四年二月配本予定)

第二巻 (二〇一四年七月配本予定)

第三巻 (二〇一五年七月配本予定)

第四巻 (二〇一六年七月配本予定)



第一巻

序文

第一章 序説

「正信偈」と「願生偈」／「正信偈」製作の動機／偈頌と問答／諸仏の伝統と知恩報徳

第二章 総讃

帰命無量寿如来／南無不可思議光

第三章 弥陀章

法蔵菩薩因位時／必至滅度願成就

第四章 釈迦章

如来所以興出世／是人名分陀利華

第五章 結誠

弥陀仏本願念仏／難中之難無過斯

第二巻

第六章 依釈段 総讃

印度西天之論家／明如来本誓応機

第七章 龍樹章

釈迦如来楞伽山／応報大悲弘誓恩

第八章 天親章

天親菩薩造論説／入生死園示応化

第三巻

第九章 曇鸞章

本師曇鸞梁天子／諸有衆生皆普化

第十章 道綽章

道綽決聖道難証／至安養界証妙果

第十一章 善導章

善導独明仏正意／即証法性之常楽

第四巻

第十二章 源信章

源信広開一代教／大悲無倦常照我

第十三章 源空章

本師源空明仏教／必以信心為能入

第十四章 結勸

弘經大士宗師等／唯可信斯高僧説

編集後記

*見出しや内容は変更する場合があります。

●詳細は下記までお問い合わせ下さい●

法蔵館

〒600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入 TEL 075-343-0458 FAX 075-371-0458
http://www.hozokan.co.jp info@hozokan.co.jp